

紫ネクタイはリスペクトの証し

尊敬する人物はハーバード大学のマイケル・サンデル教授。学生に質問を投げ掛けて議論を引き出し、自身の理論を展開する“対話型の授業”の第一人者だ。「サンデルさんは政治哲学が専門で、私の専門の教育哲学と通じる部分があります。彼のような授業ができるようになりたいです」。同教授は紫のネクタイを愛用しているそうで、それにあやかり神戸の百貨店で購入した。

初対面のカマキリに大興奮

子どものころから昆虫が大好き。故郷、北海道にはカマキリが生息していないそうで、高校の修学旅行で訪れた京都で初めて見つけ、捕まえた。「めちゃめちゃ興奮しましたね。なんたって図鑑でしか知らなかったカマキリと目と目が合ったのですから」



かばんにいつも入っているモノ

広島護国神社の交通安全のお守り。妻の実家に帰省した3年前の正月、義父に買ってもらったもの。その神社には毎年初詣に出掛けているそうだが、お守りはかばんに入れっぱなし。「本当は神社にお返しして新しいのを買うのでしょうか…。まあ、無事故無違反が続いているのでいいでしょう」



娘へのひそかな期待

普段聴く音楽はクラシックが中心。とりわけ、パッハの「無伴奏チェロ組曲」が大のお気に入り。最近、2歳になる娘が「チェロ」と言い始めたとか。「クラシックに興味を持ってくれないかなあ」と目尻を下げる。



久々の演奏会で活躍

広島大学の室内合奏団でチェロを始めた。昨年12月、兵教大のオーケストラ部から声が掛かり、マイチェロを携えて定期演奏会に出演。「十数年ぶりに本格的に弾きました。最高に気持ちよかったです!」と次のお誘いを心待ちにしている。



おお ぜき たつ や
大関達也 准教授
教育コミュニケーションコース

札幌市出身。広島大学教育学部から広島大学大学院博士課程、同大学院助手を経て、平成17(2005)年に兵庫教育大学大学院講師に就任。23(2011)年から現職。専門は教育哲学で、ドイツの哲学者ガダマーの研究から「対話としての教養」論の精緻化を目指している。「教育コミュニケーション論」「教えと学びの哲学」など4科目を担当。

先生に質問!

Q 教養論の研究のベースにされているガダマーという人物とは。

A 20世紀を代表するドイツの哲学者で、「理解するとはどういうことか」を哲学的に探究しました。彼が登場する以前は、例えば本を読む時は自分の先入観を抑えて、まずは著者の意図や本が書かれた時代背景を理解すべきという考え方でした。ガダマーはそれに対し、現代人の先入観こそが過去に書かれた書物を理解するための出発点であると唱えたのです。読書を通して過去と現在の間で対話を繰り返していくことが人間形成につながると主張しました。

Q ガダマーが唱えた解釈学と教養論に通じるものは。

A 異文化に触れたり、本や芸術に親しんだりして自分の先入観を書き換えていくことで教養も高まっていきます。ガダマーの研究を通して学んだのは、豊かな人間になるためには常に自身の生き方を問う姿勢を持ち続けることが大事だということです。

Q そういう姿勢は教員を目指す学生にも必要では。

A はい。教員に求められる条件は時代とともに変わってきます。将来、教職に就いた時自分の考えを絶対視せず、子どもや同僚の意見に耳を傾け、常に学び続ける教員であってほしいです。